目次

Ⅰ、はじめに 2
1.1　本研究の目的と課題 2
1.2　「スピーチレベル」の定義 2
1.3　「スピーチレベルシフト」の認定基準 2
Ⅱ、先行研究 3
Ⅲ、研究の資料と分析の方法 3
Ⅳ、分析結果 4
4.1　分析結果 4
4.2　結論 5
注 5
参考文献 5

Ⅰ、はじめに

1.1　本研究の目的と課題

日本語学習者にとって、特に中級以上のレベルにおいて、必要な単語と文型を身につける上に、そのような日本語のニュアンスを正しく理解して運用することこそが一番重要なことではないかと思う。しかし、これまでの日本語教育では、このことについてはあ まり触れられてこなかったそうである。それも日本語を勉強すれば勉強ほど難しくなるというウワサが起きた原因だかもしれないと思う。

日本語学習者にとって、スピーチレベルシフトの応用は難点の重要な１つではないかと思う。日本語母語話者は、初対面の相手に対してもほとんどスピーチレベル（以下、SL）を巧み に切替えながら、微妙なニュアンスを伝え、また感じとっており、コミュニケーションを効果的に進め、人間関係を円滑に保とうとしている。しかし、日本語を母語としない学習者にとっては、このスピーチレベルシフト（以下、SLS）こそが最も習得困難な点になっているとの指摘は多い。

これまでの先行研究の多くは、日本語母語話者の談話を対象として SLS が生じる要因や、不適切な SLS などといった観点から論じられている【1】。

そして、SLS に関する先行研究によると、その機能は、①心的距離の調節機能（伸びー命令、皮肉など・縮まりー親近感）②談話の展開機能（新しい話題への移行・重要部分の明示、強調・注釈、補足、独話等の挿入）の 2 種に大別されている。【2】

本研究では、大学院のゼミの談話場面での会話をとりあげ、日本語学習者（非母語話者）の発言を中心にして談話の展開機能に焦点 を当て、先行研究に挙げられている機能についても分析し、その成果を今後の日本語教育の、特に上級段階の指導にどのように効果的に生かすことができるのかを検討したい。

1.2　「スピーチレベル」の定義

谷口（2004）の SL の定義を参考に、本研究では SL とは、ある「談話」において選択される文末文体（「ですます体」・「非ですます体」）や、敬語（いわゆる尊敬語・謙譲語）の使用、不使用、終助詞（「ね」、「よ」、「わ」、など）の使用、不使用による「丁寧さ」のレベルであると規定する。

SLS に関する先行研究には、これら SL を決定する要因を組み合わせて、SLS の分類方法がいくつあるので、煩雑で分析しにくい。そのため、本研究では、「ですます体」と「非ですます体」の 2 レベルを用いる。

1.3　「スピーチレベルシフト」の認定基準

谷口（2004）の研究を参考に、本研究では 、「丁寧体」「普通体」という用語は使わずに、「ですます体」と「非ですます体」という用語を使う。

「ですます体」とは文末に「です」や「ます」が付いているもので、「でございます体」も含む。「非ですます体」とは、文末に「です」や「ます」が付かないもので、「言いさし

表現」や「体言止め」なども含む。

本研究において、SLS とは、「ですます体」を基調とするゼミの会話の中で、任意の発話が「非ですます体」に変化することを指すものとする。

Ⅱ、先行研究

SLS に関する研究は、社会言語学的立場からの分析と、文法的立場からの分析とに分けられる。

日本語教育の分野における前者の研究はさらに、杉山（2000）の研究は同じ大学の同じ学部に属する学生同士の討論におけるスピーチレベルシフトに着目したもので、丁寧語から常体へ、常体から丁寧体への発話へシフトが生じるローカルな条件を６つをあげている。①場面の変化（公的や非公的）、②司会者から学生に立場の変化、③談話管理の必要、④遠近、親疎という心理的な変化、⑤発話を聞かせる相手の変化、⑥談話構造の変化。話し手はスピーチレベルをシフトさせることによって相手にそのような様々なメッセージを送っている。

牧野（1996）は常体と敬体をウチとソトの関係でとらえ、ウチ向きは話し手向き、ソト向きは聞き手向きとしている。丁寧体の使用が圧倒的である座談会の場面をとりあげ、その際の常体への変換の例として、ある事柄が発話者の中で固定化したイメージのようになっているか、長い間考えて確信のようなものになっている場合に変換が見られると述べている。

岡部（2003）はコンピューターゲームを用いた課題解決場面を例に、スピーチレベルの変化に注目し、日本人高校生と交換留学生の対人関係の調節方法を分析する。日本人高校生と留学生とのスピーチレベルの使用の主な相違点は「自己標識」の用いられ方にあると述べている。

谷口（2004）の研究は、講演における談話展開標識の機能と形態の分析を主な目的とするため、「話し手の見解や感想などを示す」「列挙」「情景描写」という SLS の機能が認められた。

本研究では以上の先行研究を踏まえて、非母語話者の発言を対象にし、「ですます体」を基調とするゼミの会話の中で、任意の発話が「非ですます体」に変化することについての分析を行う。

Ⅲ、研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某セミナールの 40 分程度の談話 2 つ文字化したものである。

1 つは、言語学習者に絵本多読の影響についての発表者 1 人、質問者 2 人、そして先生 1 人の発言が入った。先生は日本人の先生で、ほかの三人とも日本語非母語話者だ。

もう 1 つは、日本語学習者の語学力についての四人のディスカッションである。質問者の 1 人は日本人で、発表者を含めるほかの三人は非母語話者で、そして、その三人は仲良い友達である。

日本語の談話において、SLS が起こる場合の機能には、心的距離の調節、談話の展開標識、が指摘されている。

谷口（2004）の研究では、「ですます体」を基調とする講演における談話展開標識としての SLS の機能を以下に示す。

A. 引用を示すスピーチレベルシフト

B. 繰り返しによる強調のスピーチレベルシフト
C. 結論を示すスピーチレベルシフト
D. 話し手の見解や感想などを示すスピーチレベルシフト
E. 列挙（具体例など）を示すスピーチレベルシフト
F. 情景描写（想像・回想など）のスピーチレベルシフト

本研究では、その研究の資料の文字化データからスピーチレベルシフトの観点からデータを抽出し、谷口（2004）に挙げられる SLS の機能を検証する。

Ⅳ、分析結果

4.1　分析結果

身分	SLS の機能	回数	備考
発表者	D	1	討論
質問者Ａ	D	1	
			質問
質問者Ｂ	A	1	
	B	1	
	D	1	
先生	A	1	
	D	4	アドバイス
	D	1	問題点を指す
	D	1	褒める・賛成

身分	SLS の機能	回数	備考
発表者	D	1	
	D	1	体言止め・解釈
	A	2	体言止め
	C	1	言いさし
質問者Ａ	D	1	アドバイス
	D	2	質問
	D	1	言いさし
	A	2	体言止め
	A	1	質問
質問者Ｂ			質問
質問者Ｃ	D	1	アドバイス
			日本人
質問者Ｄ	A	2	質問
	A	2	言いさし・質問
	B	1	体言止め

4.2　結論

限られたデータによって分析し、「ですます体」を基調とするゼミの会話の中で、身分を問わず、引用を示すや話し手の感想や見解などを示すときに、SLS がよく行われているということがわかった。そして「自己表現」のときに体言止めと言いさしという SLS の形式もよく行われているそうである。もしデータがさらに多くなれば、もっと深く研究を行うことができるかもしれない。

注

【1】【2】谷口（2004）を参照

参考文献

杉山ますよ（2000）「学生の討論におけるスピーチレベルシフト――丁寧体と普通体の現れ方」　『別科論集』大東文化大学別科目日本語研修課程　p 81－102

牧野成一（1996）「常体と敬体－ウチとソト変換の文法環境」「ウチとソトの言語文化学」アルク　p 100－108

谷口まや（2004）「日本語の講演の談話におけるスピーチ・レベル・シフトの形態と機能」早稲田大学日本語教育研究 4　p 117-129

岡部悦子（2003）「高校生・交換留学生のスピーチレベルシフト ： 女子学生の課題解決場面を例として」長崎外大論叢　第 6 号　p 23-34